『語学研究所論集』第 13 号 (2008), pp.77-88

バベルの塔再考

山本 真司

1. はじめに

複数の言語の存在は人間の傲慢に対して下された神の罰の結果であるとキリスト教は説いている，という考えが広まったのは，疑いもなく，バベルの塔の話の伝統的な解釈 [1] によるのであろう．しかし，なぜ，よりによって旧約聖書のこのエピソードが，言語の始原の状態を物語るものとして受け入れられ,言語観に関する議論の前提となっていった (少なくとも聖書の記述は歴史とは異なるという認識が広まるまでは) のであろうか．

この問いの意味するところは，実は，必ずしも自明ではないと思われる．ゆえに，本稿は，何よりもこの問いの意味自体を明確にすることを目指したい．それによって，ヨーロッパの (というよりは西欧の) キリスト教文化の言語観に関して，キリスト論的な問題 (それはまた，救済論的，三一論的，聖霊論的な問題でもある) が潜在していることを指摘できればと思う．

2. キリスト教は原罪を説く宗教か？

先祖にまで遡る人類共通の罪を，西欧の神学 [2] が「原罪」と名づけたことは，キリスト教徒以外の人々にもよく知られていて，キリスト教は，人間は原罪のゆえに苦しみ生きなければならないと教えている，などと言われる [3]．場合によっては，キリスト教徒自身によって (特にある特定の教派で) 信徒の罪の自覚を呼び覚ます目的で，このような言い方がなされこともある．しかし，これは，実は，非常に偏った見方なのである．

信仰宣言の中にも取り上げられていて，聖画でもよく描かれる [4] キリスト教の重要なテーマの 1 つである「キリストの黄泉下り」(しばしば復活と組み合わされて描かれる) を見てみよう．例えば，ビザンチン [5] 様式の聖画である「イコン」においては，これには幾種類かの描き方があり，怪物に擬して描かれているハーデースが死者を吐き出しているように描いたもの，あるいはキリストがアダムとエヴァの手を取って黄泉の穴より引き上げているもの，などが知られている [6]．いずれの場合も言わんとするところは，罪のゆえに死の淵に沈んでいた (アダムとエヴァに代表される) 人類を，キリストは自らの死と復活によって

救い出した，ということであろう[7]．

この聖画の話より明らかな通り，キリスト教の説くのは「キリストは，人類を罪から救った，だから人類は罪から解放された (そして望むものは誰でもこの救いに与ることができる)」ということなのである．だから，原罪の話から「人類は罪に縛られて生きている」などと理解すると，話の趣旨をまったく取り違えることになるのではないか．

なぜこのような重大な取り違えが起こってしまうのか．そもそも誰がそのような取り違えをしたのであろうか．多くの場合，非キリスト教徒の側からの誤解であるにせよ，そのような誤解を招くような言説がキリスト教の側に無いとはいえないであろう．「キリストの救い」という音信を，あたかも交換条件のごとく，「信じれば救われますよ」と言い表わす[8]と「キリストは人類を救った」よりも，むしろ，「人類は救われるべき (罪の) 状態にある」と言う具合に話の力点が置かれることになりがちだからである[9]．

なお，原罪と言う概念を説かない，例えば，正教会のキリスト教徒から見ると，原罪という概念はかなりの違和感を感じさせるものらしい．次のような発言がある．

> カトリックや新教に比べると，ギリシャ正教では，「罪のあがない」とか「罪との闘い … 」といった要素よりも，「復活」とか「喜び」とか「感謝」とかの要素の方が強いように思われる．おおざっぱな言い方をすれば，パリサイ主義に行きづまって「ああ悩める人」「この罪より我を救い給え」といったパウロよりも，神の愛によってロゴスが肉体となった，神が肉体となってイエスがあった，それを喜べ … といったヨハネの考え方の影響の方が強いように思われる．(高井寿雄「ギリシャ正教入門」前書き)

これは，精密な神学的な考察ではなく，確かに事態を簡略化し過ぎているきらいはあるが，一信者の率直な実感を述べたものであると考えれば，示唆に富む発言であると言えよう．キリスト教が，そもそもは，救いの喜びを伝えるものであるということを，端的に証ししているように見えないだろうか．

ヨーロッパの神学史・精神史全体にわたってこの問題を実証的に検討することは，本稿ではかなわない．ここでは，とりあえず，次の点を指摘しておきたい．「旧約聖書」のアダムとエヴァの物語を，「新約聖書」の伝える出来事 — キリストの救いの音信 — と切り離してとらえると，キリスト教とは似て異なるものが出来上がる，ということである．キリスト教は，「イエスはキリストである」

という前提をもって旧約聖書を解釈し直した宗教だからである.

さて, バベルの塔は, 旧約聖書の世界に属するのである. ゆえに, それをそのまま受け取ったのでは, キリスト教のものにはならないのである. では, どうするべきであろうか. それを考えるために, 似た事例をもう1つ取り上げたい. それは, キリスト到来以前と以後では事態がどう変わったと考えられているか, 理解する助けとなるであろう.

3. 聖像論争とキリスト論

ヨーロッパのとある修道院の聖堂. 壁一面にフレスコ画. とあるギリシャ人の修道士の手になるものと言う. それは, 天地創造から始まって, キリストに至るまでの, 救いの歴史を順に描いている. ところが, 観察者はある奇妙なことに気がつく. 天地創造をはじめとして旧約聖書のさまざまなエピソードにおける神の顔と, キリストの顔がそっくりなのである. いや, そっくりと言うか, 意図的に同じように描かれているのである.[10)]

このような描き方の理由は, 神が人となった, ゆえに, 神がそれになったところの人 (キリスト) を描くことによって神を顕わすことができる, ということなのだが, この言わんとするところを正確に理解するためには, 聖像の規範が定められた8世紀, 聖像論争の時代に遡らなければならない.

聖像に関する議論は, 古くから行われていて, すでに第一回の公会議 (ニケア公会議) も聖画の問題について触れている. しかし, 本稿では, 以下, 端的に聖像論争と言うときには, 8世紀の (東) ローマ帝国における皇帝レオン三世の禁止令に端を発した聖像破壊運動に伴う, 一連の論争のことを指すことにする. この時代の論争を通して聖像に関する教会の公の見解・立場が定まったとされているからである.

この問題には, それなりの政治的背景もあることは確かであるが, それはひとまず措く. わが国では, 中学・高校における歴史の教科書など, 一般向けの解説書に見出される説明 — 皇帝とその一派は, 聖書が偶像崇拝を禁止しているから,という理由で聖像・聖画を禁止しようとしたが, 異民族への布教のために[11)] 聖像を必要としていたローマ教皇はこれに反対した, というような — では, 聖像論争が, 実は, キリスト教の中心問題すなわち三位一体論の延長線上にあるということが十分に説明されていない, という印象を抱くのは, 筆者だけであろうか[12)].

旧約聖書における偶像禁止規定は, 詳しく見ると, (1) 神以外のものを崇拝してはいけない (2) 神の像をつくっては (あるいは描いては) ならない, という2つの要点が含まれる (この2つは, 密接に関連しているとは言え, 明確に区別されるべきである). 神以外のものを崇拝してはならない — 哲学的に言えば崇拝

するに値するものをこそ神と呼ぶのだから — というのはいつの時代でも当然として[13]，聖像論争は，特に (2) の点に関して，なぜ旧約聖書の時代には神の像や絵を作ってはいけないとされたのか，また，その状況が後にどう変わったのかについて，1つの結論を確認したのであった．

旧約聖書の世界においては，神はこの世のものからはかけ離れた，人間には知ることのできない存在であるとされた．預言者モーセは神を見たいと望んだが，その願いは聞き届けられなかった，と聖書は伝えている．見ることも知ることもできない存在であるから，絵にしろ像にしろ，被造物である如何なるものも，神の姿を表わすには不適格であったのである．[14]

しかし，キリストの到来によって，旧約聖書の時代と比べて状況が根本的に変化する．キリスト教は，キリストとは，神が人間に対して自らを顕されたものである，と理解する．つまり，コミュニケーションを行なう存在は，自らを誰かに向かって伝えよう (譲与・啓示しよう) とするが，神の場合，伝えようとする神と伝えられる神 (この両者の完全なる一致を説くのがいわゆる「三位一体」の教理である[15]) を考えたとき，神が伝えようとし給うた自分自身の内容を人の形で歴史の中に顕したのが，イエス・キリストであるということになる．

神が，自らを人間の形で表された．この人間は，ほかの人間と同じように，見たり触ったりすることができる，知ることができる．だから，この人間を知ることによって我々は神を知ることができるようになったのだ．

そうなると，先ほどの偶像禁止規定は，もはや当てはまらない．神は人となった，そして，この人は見たり描いたりすることができるのである．ならば，こうして描かれた人間の像は，神を顕すものとなる．これが聖像の存在の根拠である．[16]

以上のように理解すれば，聖像論争が，ヨーロッパのキリスト教世界全体を巻き込んだ大騒ぎになったわけも理解できるのではないだろうか．キリストの救いの意味そのもの，キリスト教の根幹にかかわる三位一体論に関わるものだったからこそ，賛否両論とも譲れない大論争になったということであろう．

では，このような重要な問題が，なぜ，崇拝や解釈のための便宜の問題に過ぎないかのような説明が行なわれて矮小化されるに至ったのか．誤解の芽は，既に，論争の進行中に生じていたと思われる．聖像論争の主な舞台はビザンチン帝国を中心にした東方のキリスト教世界であり，聖像擁護に関する神学的な意図は，翻訳などの問題などで，西ヨーロッパには正確には伝わらなかったと言われている．[17]

4. 新しい秩序　ペンテコステ

さて，このような神の自己譲与 — 神が自分自身を人間に与える — に関する議論は，被造物の側においても状況が根本から変えられたことを意味する．旧

約聖書の世界においては，神と被造物の間に超えることのできない隔たりがあった．しかし，キリストにおいては，神が人になったことによってこの隔たりが克服されている．人間は，被造物は，神の姿を現すのにふさわしいものとされたのだ．つまり，被造物の世界は，新しい意味を付与され，祝福された現実へと変わったのである．

重要な点は，このような祝福の出来事が，イエス・キリストにおいて起こったのみならず，すべての人々にその機会が開かれた，と言うことである．キリスト教では，このような祝福の状態を，「聖霊が下る」「聖霊が宿る」と表現する．聖書に描かれたさまざまな場面に，このような聖霊の下るさまを見ることができるが，その中でも，最も重要視されているのが，いわゆるペンテコステにおける聖霊降臨の出来事である．

よく知られているように，これは，キリストが復活して昇天した後，弟子たちが，ペンテコステ（五旬節）の祭りの日に集まっていると，天から聖霊が彼らの上に下り，彼らは，さまざまな言葉で神への賛美を語り始めた，というものである（これが異言 glossolalia なのか外国語使用 xenoglossia なのかについては解釈が分かれるところであるが，本稿では，いずれにせよ，複数言語使用 polyglossia を描いていると解釈しておく）．

タイポロジー [18] の観点からは，新約聖書に書かれたこの出来事に，旧約聖書のバベルの塔の出来事が対応すると考えられている．同じように多言語の状態でありながら，バベルの塔の場合は神の罰から分裂に至るのに対し，ペンテコステの出来事は，神のもとで（聖霊が下ることは神の臨在を示している）人々を一致させ神の賛美へと導くものとして描かれている．諸言語は，祝福され，神を賛美するのにふさわしいものとされているのである．ここでは，バベルの塔の呪い（というべきものがあったならば）が克服され，新しい現実が生まれているのが見て取れる．

ロシア受容のビザンチン典礼 [19] においては，復活祭の典礼において，ペンテコステの出来事を想起させる儀式がおこなわれる．ヨハネによる福音書の冒頭部分「はじめに言があり …」が，複数の言語で朗読されるのである．東方においてペンテコステの出来事がこのような形で解釈されるに至った背景には，西欧が典礼言語をラテン語に統一したのに対し，東方では，民族ごとに固有の言語が典礼で用いられてきたという事情があることを指摘できるであろう．このような状況を，ペンテコステの精神にふさわしい，好ましいものと見なす意見は，西洋の教会でも東方でもますます普通になりつつあるように見える．[20]

5. 再び最初の問いへ

以上の考察を経た後に，本稿の最初の問いに戻って，それを，より明確な形で

言い直すことができるであろう．キリスト教の伝えるところは，古代の呪いの結果としての苦しみではなく，バベルの呪いを克服し新しい秩序をもたらしたペンテコステの祝福であるはずである．キリスト教の観点からすれば，世界はペンテコステから再出発したはずなのに，西欧ではなぜバベルの塔に逆戻りしたような世界観の構築が行なわれてしまったのだろうか．

言語が複数あることにより生じる不都合や不幸な出来事は相変わらず存在しているのだから，それだけで，人間の注意をこの問題にひきつけ続けるのに十分であると言えるかも知れない．しかし，そのような根本的な問題だけではすべてを説明するのには十分ではないように思われる．

改めて考えてみると，ヨーロッパの歴史の中に，バベルの塔が，言語状態のシンボルとしていかに深く刻み込まれているかに気がついて驚かされる．詩人ダンテは，ヨーロッパの言語的パノラマを初めて本格的に描いたことでも知られるが，その文学活動においては，バベルの言語の混乱による「言語の原罪」[21] をいかに贖うかが問題になっていると言う (岩倉 1997).

現代において，バベルの塔の問題に取り組んだ最も重要な研究者の一人である，ウンベルト・エーコ (エーコ 1995) は，結論としては，ペンテコステ (ただしそれは世俗化されたペンテコステである) の中に言語の未来のための希望を見出しているようではあるが，そこにたどり着くまでには，やはり，バベルの問題の長い系譜を辿ることを余儀なくされている．

現在の我々もそのような歴史的状況の延長上にいることは，さまざまな点で確認できるであろう．例えば，半ば冗談のような話であるが，「語学学校『バベルの塔』」というような名称は，おそらく奇異な感じをあまり与えずに，その命名の動機を理解し得るだろうが，「語学学校『ペンテコステ』」のような名を耳にすることは容易には起きないのではないか [22] (または，その意図が伝わりにくいためで命名者もあえて選ばないのではないだろうか).

本稿では，質問の意味を明確にしただけにとどめ，それに対する答えを出すのを試みるのは，別の機会に譲らなければならない．とは言え，ヨーロッパの思想史やとりわけ神学の歴史についての研究が深められつつある現代においては，答えの見通し予測を立てることはそれほど困難ではなさそうである．

事実，本稿に出てきた，罪，原罪，復活，聖像，聖霊などのキーワードは，どれも，刷新・現代化の過程において西欧のカトリック神学が避けては通れなかった大問題を構成するものである．あるいは，西欧のキリスト教の特徴 [23] をよく示すものといっても良い (そのような意味で，本稿が，さまざまな問題点を論じるにあたり，話の糸口を東方キリスト教世界の事柄との比較・対象に求めたのは，偶然ではない). このような視点は，エーコが行ったようなヨーロッパの思想の

源流の一つを訪ねると言った作業としてはもちろん，その相対化という意味においても興味深いのではないだろうか．

注

キリスト教の専門用語は，特に日本語では，教派ごとに異なるところが多い．本稿では，原則として，カトリック教会の慣習に従った．また，聖書の引用は日本聖書協会の新共同訳を利用した．

1) 旧約聖書やその伝承（あるいは少なくともその一部は）は，周知のごとく，キリスト教の占有物ではない．しかし，本稿では，主に西ヨーロッパの思想史を論じる関係上，キリスト教における伝統的な聖書解釈をもっぱら問題にする．つまり，ユダヤ教の聖書解釈やイスラム教の見解は取り上げない．また，同じ理由から，ファンダメンタリスティックな教派の説もあまり取り上げる意味はないと思う．

2) このようにわざわざ断る必要があるのは，後に見るように，キリスト教の全教派に共有されている概念ではないからで，例えば，正教（いわゆるギリシャ正教）は，原罪という概念を説かない．ちなみに，西欧というのは，ラテン教会法が行なわれていて，ラテン＝ローマ典礼様式が行なわれている地域を指す，神学上の正式の言い方である．これと対をなすのが，「東方」（「東方カトリック教会」のように）である．

3) わが国では，生きていくのに避けられないような業のようなもの（例えば，人間は，別の生命を殺して食べていかなければ生きていけないなどのように）をこれと結びつける言説を目にすることがあるが，このような話は，キリスト教とは無関係であろう．

4) 正確に言うと，これは正教のイコンでよく現れるテーマであり，西ヨーロッパのカトリックの宗教美術では，まったく無いわけではないにせよ，あまり描かれない．

5) 「ビザンチン」とは，カトリックの側からの，典礼学（ラテン語）liturgia において行われる，いわゆる「典礼様式」(ラテン語) ritus の分類に準じた呼称である．ビザンチン典礼様式の伝統に属している当事者にとっては，「正教の」ということになろう．

6) 黄泉，ハーデースというものを１つの場所であるかのように表現するのは，いわゆる神話的表象であって，文字通り受け取る必要はないとして，キリストが黄泉に下ったという教理の言わんとするところは，キリストの死は，正真正銘，本当の死であった，ということであろう（これは，ある種の，異端やキリスト教以外のグループの教説が，キリストは死んだように見えたが本当は死ななかった，と説くのとは対照的である）．三一論論争やキリスト論論争の歴史の過程で明確にされてきたように，キリスト教においては，キリストが，本当の神であると同時に，(生においても死においても) 本当の人間でなければならないからである．この点で条件が異なってくると，救いの質そのものが変わってしまうのである．

7) キリストの救いを言い表わすには，本稿で取り上げた「ハーデースより死人を引き上げる」という表現のほかに，特に中世西ヨーロッパで広まった「罪の代価を自らの死によって支払うことによって人類をあがなった」という考え方もあるが，本稿では詳しくは触れない．後者については，現在の神学では，さまざまな問題点があることが指摘されている．

8) 実は，今日のキリスト教が，原罪からの解放を含め，救いの条件をどのように考えているかは，実は難しい問題である．カトリックでは，原罪は，通常はバプテスマ（洗礼・浸礼）を受けた時点で除かれる，と明確に規定されていて，少なくとも教義的には疑問の余地はないように見えるが，他方，儀式としての洗礼を受けることが救いの絶対的条件であるとは言えないことは，神学的にも慣習的にも確認されている（例えば，場合によっては，洗礼を受けたいという望みだけで救いを受けるには十分であるとされる）．

9) 西ヨーロッパにおける罪の意識の問題の歴史は，パネンベルク 1987 に詳しい．

10) 筆者は，ベルギーにあるシェヴェトーニュ Chevetogne の修道院（ベネディクト会系の修道院で，東方諸教会，特に正教の諸教会との交流を目指す，エキュメニカルな活動により有名）のことを念頭においているが，ビザンチン様式の聖画では，原則として誰の手によるものでも，このようなことが起こり得る．

11) 異民族への布教に加えて，文字の読めない（教育の無い）一般民衆のため，という理由が加わることもある．画像が，いわゆる「貧者の聖書」であったとする考え方である．このような考え方は，ソビエト政権下のロシアで，聖画を「民衆文化の産物」とする学説が打ち出されたことでさらに強化された（社会主義のイデオロギーのもとでは，「民衆」「人民」は，いわば錦の御旗であった ― 例えば，その時代には，例えば，フランス語，スペイン語，イタリア語のようなロマンス諸語までもが，「民衆文化」の産物とされたのである）．いずれにせよ，たとえ，本当に文字の読めない人に教えを説くのに役立ったというのが本当だとしても，結果として役に立ったというのと，はじめから「貧者の聖書」たることを目指して作られたというのでは，異なるはずではあるまいか．

12) 学校教育の現場では，市販の世界史の参考書などから判断する限りでは，昔に比べれば良くなったようではあるが，まだまだ問題のある記述がまかり通っているようである．インターネット上の日本語ウィキペディアなどでは，かなり質の良い記述も見られるようになったが，もちろん，学術的な目的に問題なく使えるほどの水準では必ずしもない．なお，言うまでもないと思うが，巻末の参照文献にウィキペディアの諸項目を載せておいたのも，信頼できる情報源として参照してもらうことができる（あるいは筆者自身が参照・依拠した）ということではなく，あくまでも，一般に流布されている情報・意見の一例として見てもらうためである．

13) 厳密に言えば，最古の段階においては，多神教的な世界の中にあっての専一神教

的な態度，つまりヤーウェ＝エロヒーム以外の神を崇拝しない，ということを意味したのであろうが，神概念の進化・純化に伴い，超越神・万物の根源としての神という概念が生まれるに至ると，そのような超越神以外のものを神とする（絶対視する）ことを禁ずるもの，と解釈されるに至ったということであろう．

14) これは，キリスト教徒がそう考えたということであって，先に見たように，歴史的に旧約聖書の同時代の人々がどう考えていたのかは，当然，別の問題である．

15) 厳密に言うと，三位一体論には，歴史の中に現れたのが本当の神に異ならないという論点と，永遠の座にいます神の中において父なる神と子なる神の間に完全な一致が存在するという論点という，２つの側面がある．両者は密接に結びついており，どちらも出発点は，キリストを通して我々人類が知ることができたのは正真正銘の神である，というキリストの弟子たちの確信である．

16) 以上，聖像論争の要点については，主に，Sendler 1988, pp.42,43 が明確でわかりやすく解説している．

17) これについても，Sendler 前掲書が詳しく述べている．

18) キリスト教では，旧約聖書と新約聖書の間にさまざまなあり方での対応を考え，旧約聖書の記述に，キリスト教的な意味を付与してきた．旧約聖書が，何らかの形で，新約の時代の出来事を予め示していたと考え，それを，時代によりまた神学的立場により，予言，影，予型，原型などと呼んできた．この場合のタイポロジーは，そのような意味での型に言及するもので，普通は，(類型論ではなく) 予型論という訳語をあてる．

19) 1 つの典礼様式の下位分類を示すのに，通俗的には，ハイフン付きの複合語を用いる（「ビザンチン＝スラヴ典礼」のように ）．しかし，典礼学研究の厳密な用語では，このように，「受容」という語を用いて示す（「スラヴ受容のビザンチン典礼」のように）．

20) 東方では民族や文化圏ごとに異なった言語が典礼の言語として用いられてきたという事実を，正教の，ペンテコステに対する理解の問題をはじめとする，神学的特色や霊性と結び付ける議論は，神学者の間でも珍しくない．ただし，正確と公平を期するために言い添えておくと，ビザンチン教会の信者の大多数がこのような理解を昔から（中世初期から）持っていたわけではない．スラヴ語による典礼も，当初はギリシャ人聖職者やビザンチン当局の無関心・妨害に遭遇したことはよく知られている．そのような事例から見る限り，当時のビザンチン帝国の知識人たちの多く（特にギリシャ語話者）は，ギリシャ語以外の言語いによる典礼にさほど積極的な意味を見出してはいなかったようである．

21) もちろん，ダンテの時代にこのような表現があったわけではないであろうが，岩倉が，バベルと原罪の問題をこのように結びつけたことは興味深い．ただし，本稿の問題意識は「キリストによる救いがあるならば（あるいはペンテコステ以後はといっ

ても良い), あがなわれるべき言語の原罪などというものは, もはや存在しないのではないか」との自問へと向かうのだが.

22) バベルの塔の名を冠した語学学校が現実に存在する (筆者が個人的に知っているのは, 特に, ローマにあるもの) ことは良く知られているが, ペンテコステを語学学校の名前にしたものはまだ見つけたことがない. さまざまな言語・文化圏で調査ができれば面白いのではないかと思う.

23) 例えば東方キリスト教世界と西ヨーロッパでは, 聖霊に関して趣の異なった神学が発達したことはよく知られている. 現代の神学においては, 西方の神学における, 聖霊論の偏り・貧しさというような観点で論じられることが多い (もちろん, 価値判断を下すのがこの論文の目的ではないのだが).

参考文献

Adam, Adolf, *Corso di liturgia*, seconda edizione, Queriniana, Brescia, 1990

Centro Azione Liturgica, *Enchiridion liturgico. Tutti I testi fondamentali della liturgia tradotti, annotti e attualizzati*, PIEMME, 1989

Centro Studi "Russia Cristiana", a cura di, *Il libro-calendario 1990. Il salvatore,* Milano, 1989

Compendio liturgico ortodosso. Ad uso delle Chiese Ortodosse italofone di Rito bizantino-Slavo, Il Cerchio – Iniziative Editoriali, Rimini, 1990

Fabris, Rinaldo, *Introduzione alla lettura dei vangeli e degli atti degli apostoli,* Istituto superiore di teologia a distanza "Ut Unum Sint" pontificia università Lateranense, Roma, 1983

Foyer Oriental Chrétien, *Molitvennik,* izdateljstvo "Žiznj s Bogom", Bruxelles, 1980

I documenti del concilio vaticano II, costituzioni – decreti – dichiarazioni, edizioni paoline, 1982

La Bibbia di Gerusalemme, edizione dehoniane, 5a ed., Bologna, 1982

Lambiasi, Francesco, *Corso di teologia sistematica. Lo spirito santo: mistero e presenza. Per una sintesi di penumatologia.* Edizione dehoniane, Bologna, 1987

Marino Qualizza, *Approccio alla Cristologia,* edizioni LINT, Trieste, 1992

Sendler, Egon, *L'Icona. Immagine dell'Invisibile. Elementi di teologia, estetica e tecnica,* terza edizione, edizioni Paoline, 1988

Slavorum Apostoli. Epistola enciclica di Giovanni Paolo II nel ricordo deell'opera evangelizzatrice dei santi Cirillo e Metodio dopo undici secoli. Edizioni paoline. Magistero 115, Figlie di San Paolo, Roma, 1985 (日本語訳:「スラボールム・アポストリースラブ人の使徒」池田敏雄訳　中央出版社　1988年)

AA. VV., *Antiche icone dai musei sovietici,* Electra, Firenze, 1984
AA.VV., *Bibbia popoli e lingue.* Prolusione del Card. Paul Poupard, 1a edizione PIEMME, 1998
AA.VV., *Presenza dell'Indivisibile. Bellezzae preghiera nelle icone russe.* seconda edizione, Edizioni Scritti Monastici, Abbazia di Praglia, Bresseo di Teolo (PD), 1989
岩倉具忠「言語と自由意志：ダンテの言語思想についての一考察」イタリア学会誌 No.47, pp. 1-17, 160-161, イタリア学会
岩島忠彦「キリストの教会を問う ― 現代カトリック教会論 ―」中央出版社 1987年
ウンベルト・エーコ「完全言語の探求」上村忠男・廣石正和訳 平凡社 1995年
大貫隆 / 佐藤研 編「イエス研究史 古代から現代まで」日本基督教団出版局 1998年
オリヴィエ・クレマン「東方正教会」冷牟田修二・白石治朗訳 文庫クセジュ 白水社 1977年
共同訳聖書実行委員会「聖書 新共同訳 旧約聖書続編つき」日本聖書協会 1987
竹森満佐一・土屋吉正・高橋保行・徳善義和・吉岡繁「シンポジウム 礼拝論」東神大パンフレット20 1981年
土屋吉正「典礼の刷新 ― 教会とともに20年」オリエンス宗教研究所 1985年
南山大学監修「第2 (sic!) バチカン公会議公文書集」中央出版社 1986年
高井寿雄「ギリシャ正教入門」改訂版 教文館 1983年
高橋保行「イコンのかたち」春秋社 1992年
高橋保行「ギリシャ正教」講談社 1980 年
W.パネンベルク「現代キリスト教の霊性」西谷幸介訳 教文館 1987年
百瀬文晃「カトリック用理解説 キリストとその教会」中央出版社 昭和63年
百瀬文晃 イエス・キリストを学ぶ：下からのキリスト論 中央出版社 1986年
百瀬文晃 キリストを知るために：カトリック要理解説 中央出版社 1985年
ルドルフ・ブルトマン『新約聖書と神話論』山岡喜久夫訳 新教出版社 1960年
ルドルフ・ブルトマン「史的イエスとキリスト論」飯峯明・橋本滋男訳 理想社 1965年
森安達也「キリスト教史 III 東方キリスト教」第一版3刷 山川出版 1987年
ヨアヒム・エレミアス著「新約聖書の中心的使信」川村輝典訳 新教出版社 1966年
廣岡正久「ロシア正教の千年 聖と俗のはざまで」日本放送出版協会 1993年
中東教会協議会編「中東キリスト教の歴史」村山盛忠・小田原緑訳 日本基督教団出版局 1989年

参照した web サイト
http://it.wikipedia.org/wiki/Icona_%28arte%29 ウィキペディア「イコン」(イタリア語)

http://it.wikipedia.org/wiki/Iconoclastia ウィキペディア「聖像破壊運動」(イタリア語)
http://it.wikipedia.org/wiki/Peccato_originale ウィキペディア「原罪」(イタリア語)
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A4%E3%82%B3%E3%83%B3 ウィキペディア「イコン」(日本語)
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8E%9F%E7%BD%AA ウィキペディア「原罪」(日本語)
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%81%96%E5%83%8F%E7%A0%B4%E5%A3%8A%E9%81%8B%E5%8B%95 ウィキペディア「聖像破壊運動」(日本語)
http://www.atelier-st-andre.net/ Egon Sendler 師のアトリエ
http://www.geocities.jp/fnagaya2002/ 東方正教会
http://www.monasterechevetogne.com/ Chevetogne の修道院
http://www.orthodoxjapan.jp/index.html 日本正教会
http://www.russiacristiana.org/ キリスト教ロシア研究センタ (在イタリア共和国ミラノ)
http://www.sam.hi-ho.ne.jp/podvorie/ ロシア正教会モスクワ総主教庁駐日代表部